

# 北ツ海古代文化の再発見

上田正昭

## 1. 北ツ海の伝承

古代における北ツ海(日本海)と日本列島の北ツ海沿岸地域とが、東北アジア・ユーラシア大陸と深いつながりをもっていることに気づくようになったのは、1970年代のはじめのころからであった。おりにふれての北ツ海文化圏にかんする所見を雑誌や新聞に発表していたのが機縁となって、1974年の11月、富山市で開催された日本海沿岸地帯振興連盟の10周年大会に招かれ、「日本海文化の伝統と創造」というテーマで記念講演をした。この時の講演は同名の冊子として、翌年の3月に刊行されている。

読み返してみると22年ばかり前の講演記録であるため、不十分な点がかなりある。しかし基本的な見方は、いまなお修正する必要がないと考えている。最近、北ツ海をめぐる古代日本の歴史と文化が改めて注目されつつあるのは、古代日本の内なるものと外なるものとの重層的発展の実相をみきわめるのに大きく寄与する動向として評価される。

こうした動向に対応するかのようには、丹後を中心とする地域でも、近時あいついで重要な発掘調査の成果が積みあげられてきた。久美浜町須田湯舟坂2号墳出土の大小4頭(2対)の双龍文のある環頭大刀、丹後町徳光の高山12号墳出土の金銅製双龍環頭大刀柄頭2点、あるいは福知山市天田の広峯15号墳出土の景初4年(240)銘盤龍鏡、弥栄町と峰山町にまたがる大田南5号墳出土の青龍3年(235)銘方格規矩四神鏡、大田南2号墳出土の2世紀後半の早い頃に製作されたと推定されている画文帯環状乳神獸鏡など、その成果は枚挙にいとまもないほどある。弥栄町遠所の貴重な製鉄遺跡の検出もみのがせない。

1995年の10月、弥栄町の奈具岡北1号墳からは、日本海沿岸地域ではじめてという加耶系の陶質土器12点がみつかって、俄然脚光をあびた。また奈具岡遺跡では、1992年の発掘調査によって、日本列島でも早い時期の水晶玉工房跡がたしかめられていたが、さらにこの度、水晶玉工房跡を含む住居跡65基以上とこぶし大の水晶原石、ほぼ完成品に近い関連遺物が大量に出土して、話題をあつめた。

弥栄町奈具岡の遺跡では、水晶玉(大・中小)のほか算盤玉・なつめ玉・管玉・勾玉など約500点以上が出土したばかりでなく、たがね・きり・針などの原石加工の製鉄工具類、

玉を磨く砥石、鉄斧・鉄鏃、加工直前段階のものと考えられる板状・棒状の鉄素材など約5,000点以上が出土している。原石の破碎・表面加工・研磨などの工程を物証する貴重な遺物が奈具岡遺跡の重みをます。

玉作りの文化をめぐっては、日本海沿岸地域では、従来北陸と出雲が重視されてきたが、京都府北部(丹後地域)が両者の中間地域としてあらたにクローズ・アップされることとなった。

これらの発掘調査の成果は、北ツ海と日本海沿岸地域のになった役割を再認識するにふさわしいのみりであった。私などがとくに興味と関心をそそられたのは、5世紀前半とみなされている奈具岡北1号墳から加耶系陶質土器が出土したことであった。加耶系陶質土器は、これまで大阪府内や九州北部の地域で、20数カ所みつまっているが、5世紀前半の、しかも弥栄町奈具岡北1号墳で出土したとの連絡をうけて、感慨ひとしおのものがあった。

須恵器の生産にかんする技術の伝来のルートが、北九州や大阪府南部にとどまらず、朝鮮半島南部(加耶)から丹後半島への伝来のコースのあったことを物語る遺物・遺跡であると直感したからである。

私がそのように直感した背景には、いくつかの理由があった。そのひとつは『日本書紀』の垂仁天皇2年是歳の条に、「一に云はく」として、朝鮮半島南部の意富加羅(大加耶)国の王子と伝える都怒我阿羅斯等(つぬがあらしと)が、御間城(みまき)天皇(崇神大王)の代に、穴戸(長門)から「嶋浦につたよひつつ、北ツ海より廻りて、出雲国を経て此間に至れり」と記す伝承を載せているからである。

この説話には、角鹿(敦賀)の地名を語る伝説的要素があり、またこの『日本書紀』の都怒我阿羅斯等の伝承と『古事記』に描く天之日矛(『日本書紀』などでは天日槍と書く)の伝承との間には類似の側面がある。詳しくは「古事記の渡来伝承」(『古代伝承史の研究』所収、塙書房、1991年)でも言及したので、ここでは再説しないが、両者の説話のなかにともに牛が登場し、神石(白石)や赤玉が乙女に変化し、その乙女が比売碁曾(ひめこそ・比売語曾)の社と神となり、彼女を追って渡来する説話の構成は同じタイプに属する。

したがって、都怒我阿羅斯等の渡来伝承をそのまま史実とみなすわけにはいかないが、両者の説話には明らかな差異も存在する(この点については『渡来の神天日槍』、いずし但馬・理想の都の祭典実行委員会、1995年で詳論した)。たとえばその渡来のコースが明確にちがっている。天之日矛(天日槍)は、新羅国の王子と伝え、彼は北九州→瀬戸内海→難波→宇治→近江→若狭・但馬へとおもむく。意富加羅国の王子とする都怒我阿羅斯等は長門→出雲そして越前へのコースをたどるのであり、北ツ海のルートを「嶋浦につたよひつつ」渡来する。

日光感精型・赤玉神女型の神話は、『三国史記』などにもみえるところであって、都怒我阿羅斯等の原伝承のふるさとは、朝鮮半島南部にあったと考えてよいであろう。いずれにしてもこの都怒我阿羅斯等の渡来伝承が、加耶と出雲・越前などのつながりを反映した説話であることにはかわりはない。福井県美浜町の獅子塚古墳出土の陶製角坏につながる角坏が加耶で出土し、福井県松岡町の二本松山古墳出土の鍍金と鍍銀の冠と類似する冠が、韓国の高靈郡池山洞32号墳から出土しているのも参考になる。

ところでこの『日本書紀』の都怒我阿羅斯等の渡来伝承は、古代の人びとが日本海をかつて北ツ海とよんでいたことを物語る史料としてもみのがせない。日本海という名称は、通説ではロシア提督のクールゼン・シュテルンが文化2年(1804)に長崎から帰国して『世界周航記』に書いたのがそのはじまりとするが、必ずしもそうではない。それよりは半世紀ばかり前に、蘭学者の山村才助(1770-1807)が、延享年間(1744~48)に執筆した『訂正増訳采覧異言』に日本海とみえており、彼は太平洋を東日本海によんでいた。日本海を重視した山村才助は、太平洋をあえて東日本海と称したのであろう。その慧眼は注目にあたいする。

## 2. 交渉の内実

日本海沿岸地域における発掘調査の成果によって、括目すべきものがつぎつぎと検証されている。その代表的な遺跡のひとつが、鳥取県淀江町の上淀廃寺跡である。淀江といえは石馬谷古墳の石馬の存在で早くから注目されていた。日本海沿岸地域では、現在までのところ、唯一の石馬のあるところで、福岡県八女市の岩戸山古墳にあったと伝える石馬との比較が論議されている。

中国の石馬の文化、朝鮮半島の石馬の文化とのつながりも改めて問題となるが、淀江の港を介する北ツ海文化のありようも軽視するわけにはいかない。その石馬谷古墳の近くであらたにみつかった、7世紀後半から8世紀のはじめにかけてのころに創建されたと推定されている上淀廃寺跡では、金堂と南北塔が確認され、さらに彩色壁画片・塑像片などが多数出土した。神将の上半身や菩薩頭部の彩色壁画片がとくに注意される。大和中心の仏教文化論を問いただす画期的な検出であったといつてよい。パルメット文様のある岡益の石堂、その近くの梶山古墳の壁画などとともに、北ツ海文化の再検討をうながす廃寺跡の発掘調査であった。上淀廃寺の隣接地域に孝靈山(高靈山)があって、この山が古くからカラヤマとよばれていたのも興味深い。

古代における北ツ海文化のありようは、『出雲国風土記』の内容にもうかがわれる。『出雲国風土記』の意宇郡の冒頭には有名な八東水臣津野命(やつかみずおみづぬのみこと)に

よる国引き神話が収録されている。この八束水臣津野命は、『出雲国風土記』の意宇郡の条によれば「八雲立つ」とことあげした神であり、島根郡の条によれば島根という地名を命名した神として特筆されている。

日本の他の古典にはこの国引き神話はみえず、『出雲国風土記』のみに伝える国引き神話がそれであった。国引き神話の主人公ともいべき八束水臣津野命という神名じたいが独自であって、類似の神名は『古事記』上巻にわずかに1カ所、須佐之男命(すさのおのみこと)の系譜に「淤美豆奴神(おみづぬのかみ)」がみえるにすぎない。

国引き神話のなりたちについての私見は、「語部と伝承」(『古代伝承史の研究』所収、塙書房、1991年)、「古代出雲の研究課題」(『古代を考える出雲』所収、吉川弘文館、1993年)などでも述べたところだが、たんなる机上の作品ではなく、在地神であったヤツカミズオミツヌノミコトを信奉する地域の口頭伝承が核となって形づくられていったと考えられる。現伝の国引き詞章では、「高志(こし)の都々(つつ)の三埼(みさき)」(北陸の珠洲の岬)や「志羅紀(しらき)の三埼(新羅の岬)が国引きの対象地域に入っているが、私見によれば、これらは国引き神話の原伝承をもととしてのちに加工されたものと考えている。しかし現伝の国引き神話に、北ツ海を媒介とする北陸の珠洲の岬や新羅の岬が含まれているのは、『出雲国風土記』の国引き神話が出雲の国のみにはとどまらず、北ツ海をなかだちとする交渉のひろがりやを反映するものになっているといつてよい。

北ツ海をめぐる交渉には対外交渉ばかりでなく対内交渉もあった。したがって新羅の岬のほか珠洲の岬も、国引きの対象地として登場することになる。『日本書紀』の崇神天皇60年7月の条には、有名な「出雲の神宝」貢上事件の説話が載っている。この事件は出雲の振根(ふるね)が筑紫へおもむいていたおりのできごととして物語られている。出雲の首長層と筑紫の首長層のまじわりを物語る説話でもあった。

実際に出雲と筑紫、出雲と北陸のつながりを傍証する例はかなりある。『出雲国風土記』によれば神門郡の古志郷の郷名の由来を、「古志の国人等、到来して堤をつくり、やがて宿居(やど)れりし所なり」と述べ、また狭結(さよふ)駅の最色(狭結)の由来を「古志国の佐与布(さよふ)人来り居れり、故(かれ)、最色(さよふ)といふ」と記すのは、古志(北陸)の人びとの来往があったことを前提とする。『同』意宇郡の母理(もり)郷や拜志(はやし)郷の条に大穴持命(大国主命)による高志の八口(やくち)の平定を伝えるのも偶然ではない。

北陸地域に出雲系の神々がまつられていたことは、たとえば『延喜式』の能登国羽咋郡に大穴持神像石神社、能登郡に宿那彦(すくなひこ)神像石神社が鎮座するのにもうかがわれる。出雲や伯耆と筑紫との地域とのかかわりは、『古事記』(上巻)の神統譜に、大国主神が宗像三女神の一神である多紀理毘売(たきりひめ)をめとり、また『延喜式』の伯耆国

会見郡に宗形神社の鎮座を記載するのにも投影されている。日本海側の式内社で、宗像神をまつる例は珍しいが、この宗形神社はもとより宗像神社であった。米子市の宗像の地名もさかのぼって古い。出雲大社の本殿の神座が北ツ海の方に向い、本殿のそばに筑紫社が古くから鎮座するのもしわれあつてのことである。

出雲を中心に発展した四隅突出型の墳丘墓の分布も興味深い。1995年の7月、広島県三次市四拾貫町の陣山遺跡で、弥生時代中期後半のものと推定される四隅突出型の墳丘墓5基が見つかったが、この地域は日本海にそそぐ江の川の上流に位置する。出雲寄りの備後・安芸から、出雲の地域で注目される四隅突出型墳丘墓は、石見・伯耆・因幡・越前・加賀・越中にひろがる。朝鮮民主主義人民共和国の慈江道楚山郡蓮舞里2号墓は四隅突出型積石塚といわれている(ただし東南の角は判然としない)。四隅突出型墳丘墓のルーツについてはなお検討すべき課題を残すとはいえ、石見・出雲から越中にかけて日本海側に分布することを改めて注意したい。

出雲に多い横口式家形石棺が北九州につながることは多くの先學がすでに指摘している。1994年の第1次調査と1995年の第2次調査によって、出雲東部で最大の規模といつてよい横穴墓群の存在がたしかめられた。島根県八束郡東出雲町の島田池遺跡がそれである。その1号横穴墓には、凝灰岩製の組合せ横口式家形石棺があつて、それには見事な灯明石がついていた。これに類するものは出雲で4基わかっているが、九州では石屋形のついたもの1例、横穴墓に造りつけられたもの2例があり、時期的には福岡県の王塚古墳のものが最も古いとされている。灯明石のルーツは北九州と考えられる。

こうした北ツ海をめぐる文化の流入・伝播の上で大きな役割をはたした存在として注目されるのが、海人の集団である。海人の集団には、沿岸(内海)漁業を主とするタイプと、遠洋(外海)漁業を主とするタイプとがあつたが、前者を漁人型とすれば、後者はより航海技術の進んだ船人型とみなすことができよう。かつて阿曇系の海人は内海型、宗像系の海人は外海型と思われる要素を指摘したことがあるが(『海神の原像』、『住吉と宗像の神』所収、筑摩書房、1988年)、北ツ海をめぐる交渉でも、対内的と対外的とがあつたと考えられる。対外交渉に従事する海人集団は、漁人型から成長した船人型の人びとが多かつたのではないか。

公権力による社会的分業の編成と徴税の組織として具体化した部民制は、海人集団にも浸透してゆく。そしてしだいに海(部)直→海部の統層関係が明確化する。国家間の対外交渉においては、海部化した人びとが利用されたにちがいない。

日本海側における海部郷の東限は、越前(福井県)坂井郡の海部郷(『和名類聚抄』)だが、若狭にも海部(平城宮出土木簡)、丹後にも熊野郡海部郷、加佐郡凡海郷(『和名類聚抄』)、

海部直(「籠名神社祝部氏系図」)、但馬にも海直(『新撰姓氏録』)などが分布し、隠岐の海部郡海部郷(『和名類聚抄』)におよぶ。北ツ海沿岸地域の海部と北ツ海をめぐる内的・外的交渉のありようについても再検討する必要がある。

北ツ海が対外交渉において重要な意味をもっていたことは、高句麗使節が570年・573年・668年の場合、すべて北陸から上陸し、渤海使節が727年から919年までの間に35回(正式使節34回)、渤海などの「難民」の来着2回のうち、日本海側が30回であり、これに929年の東丹国使の丹後郡大津浜を加えると、その数はさらに増加する。

遣渤海使の出発港・帰着港、渤海使帰国のさいの出発地については、これを明記する史料が少ないので断言できないが、判明するのは遣渤海使(送渤海使を含む)15回のうちでは、能登(3)、越前(3)、加賀(2)、出雲(2)、伯耆(1)となり、遣渤海使の帰着港は越前(4)、隠岐(2)と、やはり日本海側である。

古代の日本と渤海についての私見は、すでに「古代日本と渤海」(『謎の王国・渤海』所収、角川書店、1994年)や「日本と渤海の交渉—交渉史の問題点をめぐって」(『いま、よみがえる海の道』所収、環日本海松江国際交流会議発行、1996年)などで述べたが、日本海側から上陸し、日本海側から出発したことのみをもって、実際に渤海使と日本海側の地域の人びととの交渉があったと論断するわけにはいかない。上陸地や帰国地がたんなる通過点にすぎない場合もある。入京を許されなかった渤海使などが実際に日本海側に滞在した期間と、そのなかでの地域の人びととどのようなまじわりをもったか、その点を検討しなければ、交渉の内実は不明というほかない。

渤海使を「商旅」とみなした右大臣藤原緒嗣の言上(『類聚国史』承和3年3月の条)、諸市人と実際に交易した渤海使(『日本三代実録』貞観14年5月22日の条)の例にもみられるように、後期の渤海使には「商旅」のおもむきがあった。

827年の渤海使や882年の渤海使の場合には、国使らと私的な交易をすることを禁止されているが(『類聚国史』、『日本三代実録』)、これを逆にいえば私的な交易が現実に実行されていたが故の禁令であった。入京を許されなかったり、あるいは帰国準備がととのわなかったり、帰国の途次遭難して再入国したりして、日本海側にかかなり長期に滞留した人びとが現地の人びとと交流した例もあった。809年に入京した渤海使メンバーである高多仏のように、越中に滞留・安置されて渤海語を教えた人物もいた(『日本紀略』・『日本後紀』)。北ツ海をめぐる交渉の多様性とその実相をさらにみきわめることが、あらたな課題として浮かびあがってくる。

### 3. ×印の謎

1985年は古代史にとっての注目すべき年であった。1985年の夏には、前年の夏に鳥根県斐川町のいわゆる荒神谷遺跡で、銅剣(中細形C)がなんと358本の埋納がみつかったのにつづいて、銅鐸6個・銅矛16本が検出された。そして1985年の9月からは、奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳の本格的調査がはじまり、そして奈良市の平城京二条大路の長屋王邸跡とその側溝から木簡(約74,000点)が出土した。

そのいずれもが貴重な遺物・遺跡であったが、日本海側でもっとも注目されるのが、斐川町の神庭(かんば)遺跡であった。発掘の当初から、私が一貫してあえて荒神谷遺跡とはいわずに神庭遺跡あるいは荒神谷神庭遺跡・神庭荒神谷遺跡などと称してきたのには、それなりの理由があった。荒神谷という地名は古代にさかのぼる地名ではない。遺跡の場所は神庭にあった。『出雲国風土記』の出雲郡内にみえる神名火(かんなび)山(仏経山)は神庭遺跡からあおぐことができる。この神名火山の峰(山山領)には、『出雲国風土記』が述べるように「曾支能夜社(そきのやのやしろ)に坐す伎比佐加美高日子命(きひさかみたかひこのみこと)の社」があった。

神庭遺跡あたりの谷は西谷(さいだに)とよばれ、サイダニは斎谷(さいだに)であった可能性もある。斐川町宇夜神庭に鎮座する神代(かむしろ)神社は、『出雲国風土記』に記す「神代社」であり、『延喜式』に載す「神代神社」であった。そして宇夜神庭の「宇夜里」は、『出雲国風土記』が「宇夜都弁命(うやつべのみこと)、その山峯(宇夜山・権現山)に天降り坐ましき、即ち彼の神の社、今に至るまで、猶(なお)此の處に坐ませり、故(かれ)、宇夜里といふ」と明記するように古い里名である。『出雲国風土記』には出雲国独自の神の降臨伝承を、飯石郷・波多郷・屋代郷の各条にも記載するが、その降臨した神(宇夜都弁命)の社が「今に至るまで、猶此の處に坐せり」と特記するのは、宇夜の里の場合のみである。

この宇夜里がのちに健部(たけるべ)郷と改められた。この地域に現実に建(健)部集団が居住したことは天平6年(734)の『出雲国計会帳』や天平11年(739)の『大税負死亡人帳』によってたしかめることができる(出雲郡の建部集団については「荒神谷神庭遺跡と藤ノ木古墳」、『古代伝承史の研究』所収、塙書房、1991年で論究した)。

神庭の地名は古くからあって、銅鐸14個、銅戈7本が出土した神戸市櫻ヶ丘の地名も、かつてはカミカ(神丘・神岡)であり、銅鐸が出土した兵庫県夢前町のそれは神種(こうのくさ)であった。滋賀県野洲町の大岩山では、あわせて23個の銅鐸が出土したが、大岩山の由来は巨大な磐座(いわくら)信仰とのつながりを示唆する。こうしたありようを前提として、発掘当初から、あえて神庭という遺跡名にこだわりつづけてきたのである。

全国で総計300本あまりの銅剣出土例が知られていたが、神庭遺跡では実に358本(計161kg)の銅剣(しかも同一型式の中細形C)が埋納されていたことは驚きであった。そしてさらに銅鐸6個と銅矛16本が伴出したのである。銅戈も出土するのではないかと期待していたが伴出しなかったが(出雲大社の命主=いのちぬし=神社では銅戈の出土が伝えられている)、神庭遺跡の銅鐸がいわゆる近畿につながり、銅矛が北九州につながるとしても、青銅器文化の銅鐸文化・銅矛文化のその接点ともいべき神庭遺跡にこのようにたくさん埋納された銅剣はいったいどこで製作されたのか。神庭遺跡のシンポジウムでその歴史的背景を報告したおり(『荒神谷の謎に挑む』所収、角川書店、1987年)、銅剣の出雲製作地説を支持したが、出雲で神庭遺跡出土の銅剣の鑄型がみつからない限り速断するわけにはいかない。

『記』・『紀』の神話では、大国主神の別名を八千矛神やちほこのかみと称し、『紀』(巻第3)では出雲をその代表とする葦原(あしはら)の中つ国を「細戈(くわしほこ)の千足(ちたる)国」とよぶと共に、『日本書紀』の神話では大国主神(大己貴神)が、国ゆずりのさいに「吾、この矛(広矛)を以て、卒(つい)に功治ことなせることあり、天孫、若(も)しこの矛を用ひて国を治(し)らさば、必ず平安(さき)くまさむ」とことあげする。出雲の主宰神(所造天下大神)ともいふべき大国主神の亦の名が八千矛神であり、出雲の言向(ことむけ)のシンボルを矛とするのも興味深い。1974年の11月に出版された『出雲』(毎日新聞社)のなかで、出雲の青銅器文化の保有する意義を重視すべきだとしたのは、八東郡鹿島町の志谷奥遺跡で銅剣6本・銅鐸2個が伴出していたことのみではない。神話においても青銅器文化を反映する伝承がみいだされたからであった。

神庭遺跡出土の鉄剣・銅鐸・銅矛については、その形態の詳細な吟味、銅・鉛・錫などの成分にかんする定量分析などが進められてきたが、私があらたに注目しているのは、その埋納の状況である。銅鐸は鱗(ひれ)を上下にして横たえ、銅剣・銅矛は双刃を上下に立てて横たえた埋納をなし、しかも銅鐸・銅矛群の上には1.1×0.7mの小建物、銅剣群の上には3.2×4.5mの建物がたてられていた形跡のあること、そして358本の銅剣のうち328本の茎(なかご)に×印のあること、その2つである。

徳島市の矢野遺跡の銅鐸出土地のまわりに柱穴があったことを参照すれば、神庭遺跡の銅剣群や銅鐸・銅矛群には、その埋納を保護し、かつなんらかのまつりとかかわりのある覆屋的な施設があった可能性が高い。問題は、神庭遺跡埋納銅剣の92%になぜ×印が付けられているのか。その謎をどう解釈するのか。この×印が鑄造後の埋納前にタガネなどで刻されたものであったことはまちがいない。

この銅剣358本はいずれもが同一の型式であり、ひとつとして刃こぼれがない。しかも



東西方向に鋒と茎がほぼ水平になるように並べて、刃を立てた状態で出土している。A列は鋒の方向を1本ずつ変えて交互に置き、B列は南側の4本だけ鋒が西を向き、5本目からはやはり交互に置いていたという。C列・D列はすべて鋒を東に向けて置いていたと報告されている。その埋納が意識的に行なわれていたことはまちがいない。

×印のある遺物としては、大阪府東奈良遺跡出土の銅戈の土製鑄型聖部、奈良県の唐古・鍵遺跡の鹿の下顎骨製装身具、大阪府の瓜生堂遺跡の銅鐸形土製品のへら書き、滋賀県の鴨山古墳出土の刀剣装具、福岡県石人山古墳の家形石棺や同県の井寺古墳の石障にある直弧文と同心円文の×印などが知られている。

それらの例のみで×印の謎を理解することはむずかしい。そこで参考になるのが、葬送にかんする民俗の事例である。×印を青森県や北九州の地域ではモガリとよぶ例があり、奈良県吉野郡川上町や初瀬町では、仏送りの供物にそうめんを×形にかけるといふ。宮城県の地域では盆の仏棚のかざりに×印の白布をとりつけ、岡山県の長船町では、埋葬直後の新墓をむしろで覆い×形に竹をくむと報告されている。

これらは私の知っている若干の民俗事例にすぎないが、×印あるいは×形が、イミのしるしであり、魔よけの除災・避邪の意味をもっていたことが察知される。考古学と民俗学を安易に結びつけるわけにはいかないが、神庭遺跡で検出された銅剣×印の意味づけの参考になることはたしかであろう。

神庭遺跡における銅剣などの埋納の時期については、紀元1世紀前半とみなす説が有力とされているが、なぜ358本にもおよぶ銅剣が1箇所を整然と埋納されていたのか。その製作地と埋納の目的が改めて問われる。斐川町の神庭遺跡のあと、2世紀後半のころから西谷墳丘墓群が築造されてくる。その推移もまた出雲古代史の動向を探求するさいの研究課題となる。そしてそれが北ツ海をめぐる政治と文化に、いかなるかわりをもったか、さらなる探求が期待される。

(うえだ・まさあき=当センター理事・大阪女子大学学長・京都大学名誉教授)

